

えど友ホームページ
<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会会報

目次	驚異の「五百羅漢図」全100幅一挙公開! …………… 1	えど友サークルだより …………… 7
	友の会セミナー「囲碁家元本因坊家文書の世界」…………… 2	会議・会合日誌 …………… 7
	友の会セミナー「江戸の政治改革」…………… 3	えど友プラザ「千住界隈を歩く」…………… 8
	特別観覧会「江〜姫たちの戦国〜」…………… 4	「相撲の歴史と相撲食」…………… 8
	江戸博クリップ「18年目の春」…………… 4	「双葉山を目指す白鵬」…………… 9
	見学会「再訪 江戸城周辺の探訪—その2」(内濠) …… 5	落語で江戸散歩…⑩【おせつ徳三郎】…………… 10
見学会「江戸博常設展を見る」…………… 6	催事案内 / 会員優待のお知らせ …………… 11 ~ 12	

驚異の「五百羅漢図」全100幅一挙公開!

—特別展「五百羅漢—増上寺秘蔵の仏画 幕末の絵師 狩野一信」担当の橋本由起子学芸員に聞く—

—そもそも、増上寺の「五百羅漢図」とは? 狩野一信という絵師もあまり知られていませんね。

橋本 狩野一信は幕末の絵師で、江戸本所生まれの人です。一部の専門家には高く評価されていますが、一般にはまだあまり知られていません。作品として確認されている数も多くありませんが、増上寺の「五百羅漢図」は一信の代表作です。一信は信仰心にあつい人で、約10年の歳月を費やして制作にかかりました。残念ながら96幅まで描き終えた48歳で没し、残りは妻・妙安と弟子・一純が描き上げて文久3(1863)年増上寺に奉納されました。—かなり大きなものですが、100幅も、どうやって展示するのでしょうか。

橋本 表装された状態で天地3mほどになるので、今回はこのために特別に縦長のケースを用意しているところです。100幅の羅漢さんが林立している間を縫うように見て歩くというイメージです。

—100幅も羅漢さんを描くというのは並々ならぬ執念を感じますが、見る方も根気がいりそうですね。

橋本 たしかに、ただ漫然と見ていると全部が羅漢さんですから似たような

ものに見えて流してしまいそうです。5幅から10幅区切りで、羅漢さんの日常だとか、地獄から人々を救済する場面など、描かれている内容が変わりますのでその場面が何かをまず把握しておくとういいますね。羅漢ビームや神通力で風を起こしたりする場面など、細かく見るととてもおもしろい発見があります。ちょっとギョッとするようなものもありますよ。



▲狩野一信 五百羅漢図
第22幅 六道 地獄(部分)

今回の「五百羅漢図」に加えて、一信の作品である成田山新勝寺の「釈迦文殊普賢四天王十大弟子図」「十六羅漢図」が特別出品されるのも注目されます。

港区内の寺院が所蔵している下絵も展示されますので、羅漢図の制作過程を見ることもできます。なお、東京国立博物館から出品される「五百羅漢図」は増上寺本と図柄はほとんど同じですが、サイズは2分の1ほどで、色使いや陰影の表現などの違いを比較して見ることができます。

—常設展示室でも増上寺関係の展示会があるようですが……。

橋本 「芝増上寺〜秀忠とお江の寺〜」というタイトルの企画展を常設展示室内で同時開催します。1階の特別展とこの企画展をあわせみると増上寺がどんなお寺なのか理解が深まると思いますので、ぜひ両方見ていただきたいですね。

—命を削ってまでも描き上げた一信の羅漢図に会うのが楽しみです。100幅一挙公開は見逃せませんね。ありがとうございました。

【聞き手】文：広報部会・中村貞子

私と囲碁のつながり

まずこのセミナーにお招きに預かった理由から申し述べます。私は歴史学を専門としていますが、弟の高尾紳路はプロ棋士です。最近、囲碁はマインド・スポーツとしてオリンピックの登録競技にもなっています。弟は広州アジア大会の日本代表にもなりまして、一時は名人・本因坊になったことがあります。それでこの場でお時間を拝借する運びになったわけです。兄貴はレキシで、弟はイゴキシ。同じ「キシ」なんですね。

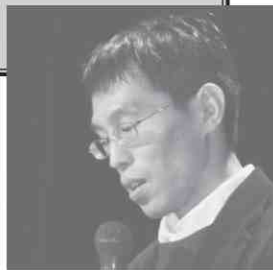
兄弟で小学校の時より囲碁を習い始めましたが、私はそちらに才能がなく、弟は棋士の道に進みました。ところで、わが家高尾家の歴史は伊勢国四日市宿近在に発します。「清水の次郎長一代記」に名高い高神山の争いに居合わせたことがある高尾善兵衛という侠客は、私たち兄弟の先祖にあたります。まあ、きっと博徒の血が勝負争いをする棋士を生んだのでしょう。わたし自身も、博徒の歴史を研究していますから、「妙な縁」つてあるものですね。

囲碁の歴史

さて、囲碁とはどのようなゲームか。陣地取りゲームであり、石取りゲームでもあります。いたって素っ気ないものです。陣地を多く囲ったほうが勝ちなのですが、ゲーム終了後、相手からとった石を相手の陣地に埋めます。それで陣地の目を数えて勝敗を決します。ルールは単純ですが、この単純さがクセモノで、難しいゲームに発展するのです。その詳細は省略します。

この囲碁の起源は中国大陸で、その後日本に伝来しました。正倉院にも碁盤が残り、『枕草子』『源氏物語』にも登場し、織田信長や豊臣秀吉も楽しんだと記録が残っています。^{きんきしよが}「碁棋書画」は貴人のたしなみとされ、「碁」は囲碁のことです。将棋が庶民の楽しみであるのに対し、囲碁は貴人のたしなみでした。下層階級の人びとにとっては、上層階級の人びとに近づくための重要なツールのひとつでした。例えば、大久保利通が碁を勉強して島津久光に近づいた、という逸話は、歴史に詳しいみ

第99回 江戸東京博物館友の会セミナー
(2010/11/27)
「**碁家元本因坊家文書の世界**」
— **碁のルールから歴史まで** —
講師 高尾善希さん (立正大学非常勤講師・文学博士)



なさんなら、よくご存じだと思います。

本格的に碁が普及してきたのは江戸時代です。徳川家康が碁打ちを召し抱えたことがきっかけです。室町時代にも碁打ちはいましたが、時々富裕層の招きに応じるだけの者たちでした。扶持を支給されて安定的収入を得る碁棋士が誕生したのは江戸時代です。その中から数々の家元が誕生しました。身分的には町人で寺社奉行の支配下にありました。禄高は一番格上の本因坊家で僅か50石。棋士の主な仕事は「お城碁」といって、年に1回將軍の面前で碁を打つというものです。日常は弟子を集めて碁を教えたり、段位を発行したりして過ごしていたようです。

家元制度は相続制度です。しかし碁は勝負事ですから実子相続は難しい。そのため、ほとんどが養子相続でした。家元制度としての本因坊家は昭和15(1940)年の本因坊秀哉を最後に終了し、その後は東京日日新聞(現

在の毎日新聞社)が主催する実力制のタイトル制本因坊に移行しました。例えば弟の高尾紳路は、本因坊のタイトルをとった時、「本因坊秀紳」という本因坊名をつけました。これは家元制度の名残りです。ちなみに弟は師弟関係においても本因坊秀哉の流れをくみます。いまでも本因坊家の流れのことを「坊門」といいます。

本因坊家文書の調査

さて、私は東京都公文書館史料編さん係に勤務しています。当館所蔵の日本棋院関係書類をご案内したことがきっかけで、わたしも日本棋院所蔵の本因坊家文書を調査させて頂くことになりました。平成19年、日本棋院の対局室「寂光の間」にて、文書調査を実施しました。「重要 碁故(ママ)文書」「専心堂文庫」と書かれた古めかしい文庫の中に、主に本因坊家の勤務に関わる文書が納められていました。

この中で最も古いものは宝永3(1706)年の本因坊家の由来を書いた重要な史料「伝信録」です。花押の横に当主道知の直筆署名があります。本因坊家の中でも逸材で早世し非常に惜しまれた秀策に関するもの、お城碁に関するものなど、興味深い記録群です。

お城碁は年末に棋士が集まり黒書院で碁を將軍に披露します。最も重要な仕事のはずです。ところがこの文書では6名もの棋士が病欠となっています。

お城碁はその場で本当に勝負するものではありません。勝負に時間がかかりますから、数日前から碁を打ち始めて勝負を決し、お城碁当日はその手順を披露するだけなのです。しかし、それでも勝負がつかないことがあったようです。その時は「兩人病氣」と申し立てて登城しないよう取り計らいました。まあ、のんきなものです。

この本因坊家文書、実はまだすべてを読み込んでいるわけではありません。全調査が終了した暁には本に書きあげようかと思っていますが、いつのことになるやら。期待しないで待っててください。

【記録】文・写真：広報部会・深尾恵美子

「江戸の政治改革—将軍吉宗 vs. 尾張宗春—」

講師 大石 学さん (東京学芸大学教授)



将軍吉宗の享保改革

皆さんがよくご存じの将軍吉宗が理想を迫って行った享保改革は日本の社会 3,000 万人の静かな改革として 29 年間に及び、国民生活の安定に貢献しました。それ以前の 1660 年前後は低成長時代を迎えて長期の政治的停滞のため、国家再編・行政改革の必要性があり、享保改革の課題として統治体制の強化、財政再建、官僚システムの確立となったようです。「大きな政府」「強い政府」による国民生活の維持・安定は国家機能、公共機能の拡大、日本社会の均質化を進めました。しかし、そこにこの規制強化・緊縮政治に対する根深い数多くの政治的批判があったのも否めませんでした。その代表が自己のマニフェスト(規制の緩和・積極的な経済振興政策・個性の尊重など)である「温知政要」を配布した尾張七代藩主徳川宗春でした。

尾張藩主徳川宗春事件

尾張藩三代藩主徳川綱誠の二十男として誕生した宗春は当時よく知られているものとは別の御三家論(御三家とは将軍家・尾張家・紀州家をさし、東照宮の仰せにいわく尾張・紀伊の両家は鳥の両翼の如く将軍家の補佐である)を持ちつつ、享保 15(1730)年尾張藩七代藩主に就任しました。享保 16(1731)年「小さな政府」を提唱した「温知政要」を藩士に配布、数々の規制緩和を実行して吉宗に反旗を翻し緊縮政治である享保の改革に敢然と対抗しました。遊芸、音曲、鳴り物を自由とし、藩士の門限を撤廃。全国的な儉約・緊縮の風潮の中、名古屋東照宮の例祭を盛大に行ない、藩士の芝居見物も町中の踊り組 200 組を踊らせた盆踊り(見物人が群れをなし京都の祇園祭りを上回ったともいわれる)も許可しました。また自らの子供の初節

句の際、家康から尾張藩祖に与えられた旗など多くの幟、菖蒲兜、武具や馬具を並べ、町人たちに見せました。自身も派手なパフォーマンスを繰り広げた結果、名古屋は有力商売人(三井・大丸・松坂屋など)が次々に店を開き、芝居・遊郭が発達、享保 16 年暮れからは「日々繁盛、都まざりのにぎわいなり」と言われるほどになりました。

将軍吉宗 vs. 尾張宗春

吉宗は享保 17(1732)年江戸尾張藩邸の宗春のもとへ使者を派遣し、3 カ条(国元ならばともかく江戸でほしいままに物見遊山したこと・嫡子万五郎の節句の折江戸屋敷においてみだりに町人に見物させたこと・儉約令を守らないこと)の詰問を突き付けました。もちろん宗春はこれに反論し、両者の対立は一気に表面化したのです。吉宗はただちに「温知政要」を出版しようとしていた京都の西堀川の版元に対し奉行所を通じて発売禁止処分を行いました。しかし民衆の宗春称賛は、享保改革に対する社会的批判を背景に各所に起こり、「公方様は乞食に似たり、尾張は天下に似たり」の落書にもあるように幕府批判に発展していきました。

宗春失脚と幕府権力の強化

宗春の開放政策は成功したかのように見えたが、あまりにも急激な開放と規制緩和は時をおかずその限界の様相を呈してきました。名古屋城下の風紀の乱れや藩財政の悪化です。町人よりの借金膨らむ一方でした。宗春は 3 回目の国入りのとき、これを軌道修正すべく新たな権力基盤を創出して藩政を主導しようとしていました。尾張藩重臣はこれに反発、宗春との距離を置き始め、幕閣と宗春をめぐる話し合いを開始し重臣たちのクーデターにおよびました。これにより宗春の藩内の権力基盤は一気に喪失。また、尾張に

不利なさまざまなうわさや憶測(大規模な猪狩りは陰謀のための軍事動員とか、将軍家対尾張藩の戦乱が近い等々)が流れました。元文 4(1739)年尾張藩重臣が江戸城羽目の間に呼び出され、「不行跡が重なり藩政が乱れ、士民が困窮した」との吉宗の意として宗春蟄居謹慎が申し渡されました。このことは藩主の専制を抑え、藩政の独自性を抑える政治、すなわち幕府権力(中央権力)を強化し、法と官僚による国家支配のシステムの確立をめざす享保改革の方針のあらわれでもありました。宗春失脚事件は享保改革における幕府権力の強化、大名統制という動向のなかで起こった象徴的な事件だったので、当の宗春は吉宗より隠居を伝えられると、とんでもない出来事と嘆く周りに「尾張初もの」と平然としていたそうです。その後、宗春派の解体が行なわれ、後継ぎ八代藩主は美濃高須藩主の松平但馬守義淳となりました。

宗春事件の歴史的意義

吉宗の「大きな政府」が宗春の「小さな政府」を圧伏したこの出来事は、今日まで続く政治の基調を形成(官僚による政治が政治家による政治を凌駕)したのです。江戸後期以来のこの日本型社会・日本型システムは今日今まで脈々と受け継がれてきましたが、近年、「官」から「民」へ、中央から地方へと見直しが行われています。小泉政権以後の政治家と官僚とのバトルなど「宗春」政治の再評価ともいえる動きが起こってきています。享保改革を断行した将軍徳川吉宗と規制緩和に挑み名君ともいわれた徳川宗春の戦いは、今日においても重要な意義をもっているといえます。

【記録】文：広報部会・松田悠美子
写真：同・佐藤幸彦

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2011/1/7)

2011年NHK大河ドラマ特別展 『江～姫たちの戦国～』



新春1月2日から2月20日まで開催の特別展「江～姫たちの戦国～」の特別観覧会が1月7日17時から開催されました。

齋藤慎一学芸員より〔この観覧会の主人公お江は戦国時代の終わり、二度の落城と三度の結婚を経験し、織田信長は伯父（母市の兄）、豊臣秀吉は義兄（姉茶々の夫）、徳川家康は義父（夫秀忠の父）そして天皇家も血縁（孫が明正天皇）というスーパーセレブでありながら、お江の遺品や歴史資料が少ないため、お江の周りの人々の遺品や歴史資料などから、お江の波乱に満ちた生涯を浮き彫りにする構成になっている〕との説明をうけました。1部で

は、お江の父^{あざい}浅井長政、母市、伯父織田信長に関連した資料。2部では長姉茶々（淀殿）が嫁いだ豊臣家の人々。3部では次姉初と京極家の人々。4部ではお江が嫁いだ徳川家の人々。特に激動の戦国末期を生きた女性（姫）たちの遺品や歴史資料を数多く展示することで、女性の視点からこの時代をとらえ直す構成になっているとのこと。

大河ドラマの特別展ということで企画の準備を始めた昨年の6月の会議の最中、東京目黒の祐天寺から1通のメールが届いた^{くう}そうです。「家康像が安置されていた^{くう}宮殿（立派な位牌の厨子）を解体修理したところ柱に『寛永五年辰九月拾五日御建立宗源院御玉家』と墨書してある」とつまり宗源院＝宗源院＝お江の3回忌に合わせて建立された宮殿が発見されたというメールが「江」展の企画会議に合わせて届いたのです。

その後調査したところ、増上寺にあった宮殿は戦災で宗源院霊牌所とともに焼失しています。それでは、だれが、どこで作った宮殿なのでしょう。祐天寺の記録で駿府（静岡）の宝台院（徳川秀忠の母西郷局の菩提寺）の住職欣説の寄付とわかり、宝台院住職欣説の記録から八代将軍の命により宗源

院御霊屋が壊されたことがわかりました。宝台院は寛永5（1628）年当時駿河藩主だった徳川忠長（お江の次男）により再建されています。高崎の大信寺（徳川忠長の墓がある）にある「徳川忠長の書状」により宗源院の御霊屋を宝台院に建立したことに関する経緯がわかりました。「増上寺で行われる宗源院殿の法事に参詣の予定であったが、宗源院殿御霊屋を造営したことにより、幕府の命が下り駿府にて仏事を営むことになった」という内容でした。

この宮殿は^{ひのき}総檜造りで全面に漆下地に漆塗りを施し、^{きんぱく}金箔貼りとした上に、彩色と飾金具で全面装飾されています。本体内部の壁には蓮池と空を舞う飛天が描かれ、金具も蓮華紋と極楽のイメージを作り出しています。この観覧会に展示された経緯も興味深いものですが、造られた時や今に至る歴史的なエピソードにますます興味をそそられ、会員224名は展示室に移動しました。

会場は女性たちの遺品や歴史資料が多いので華やかでかつ穏やかな雰囲気でしたが、豊臣秀次一族像や宗源院の宮殿の説明資料に歴史の悲劇も垣間見ました。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤美代子



江戸博クリップ

「18年目の春」

何を書いてもよい、と言われ、はてさて困った。職業柄、文章を書くことは多いが、大抵小難しいテーマがある。この文は、友の会会報向けのエッセイ。硬い文章を読んでもいただくのも忍びない。

文章を書くことをはじめ、何かを表現するときに、ひどく不器用な自分にいつも失望する。小さい頃から、元日に日記をつけはじめても、数日で白紙になった。絵を描くのが好きだったが、とても見せられたものではない。ただ描くのに夢中になれる、その時間に没頭した。

学芸員 岡本純子

大学時代に写真部にいた。オートフォーカスの一眼レフでも、手ブレでろくな写真が撮れなかった。でも、現像液に印画紙を浸し、画像が浮き上がるのを見るのが楽しかった。

書道を習っているのに、師匠あての年賀状をついつい印刷してしまうことに、毎年罪の意識を感じている。しかし、たまに^{すずり}硯で墨をするときに、そのおいをかぐのが好きだ。

携帯でメールを打つのもおっくうだ。毎日ブログやツイッターを綴る人は、よくネタがあるものだとほんと感心する。

ようするに、私はとても自己中心的で、面倒くさがりやなのだ。学芸員には向いていないのではないかと常々考える。けれども、たぶんこの仕事の中には、ふと私を夢中にさせてくれる何か、どこかしらに潜んでいて、気づいたら、江戸博で18年目の春を迎えているということらしい。

今も、この文章をパソコンで打つ、その行為が心地良かったりする。読んでいただく方には、申し訳ないと思う。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師、事務職など館職員の方に執筆をお願いしています。

「再訪 江戸城周辺の探訪—その2」

(内濠)



11月28日(日)、東京メトロ「九段下」駅前から反時計回りに江戸城(皇居)内濠約5.1kmを約3時間半で一周する見学会でした。暖かい小春日和で、計174名の参加となりました。受付場所の後方には日本武道館の屋根が見え、右側の靖国通り街路樹のイチョウは黄金色に染まっていました。

九段坂から半蔵門、桜田門へ

昭和館は外観のみを眺め、九段坂を上りました。濠の反対側には城内の庭の手入れをする下級武士が住む九段の長屋が連なり、今より急な坂道で石段もあったそうです。牛ヶ淵を左に見て、田安台の田安門を見学しました。次の常燈明台は高台で東京湾が見え、漁船の目印としてまた靖国神社に祭られた霊のため明治4(1871)年に建てられ、もともとは神社内にあったものを道路改修のため今の場所に移築し、現在も夕方には点灯されるとのことです。

靖国通りから内濠沿いに左に折れると千鳥ヶ淵です。なだらかな曲線は大池だった自然の地形を活かし内濠の一部としたからで、名前は千鳥に似ているからという説があるようです。桜の名所を今回は紅葉を愛でながら散策しました。

千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、花壇や広葉樹に囲まれた六角堂の地下に約35万体の遺骨が安置されているそうです。

英国大使館を木々の合間に見ながら半蔵門へと向かいましたが、午後の早い時間で皇居一周マラソンのランナー



▲林の中に田安門

が私たちを次々に追い抜いて行きました。門の警備をした服部半蔵に由来する半蔵門は、大手門と正反対の裏手にあり、まっすぐ甲州街道に通じ非常時の脱出用の門だったそうで、現在門内は吹上御所となっています。

画家としても有名な渡辺華山の生誕の地は最高裁判所敷地内にありました。このあたりから道は三宅坂となり、半蔵門と桜田門間の桜田濠の、大都会の中とは思えない雄大な景色が眼前に広がっていました。緑豊かな斜面は芝の土手と上部の低い石垣で鉢巻を巻いたような鉢巻土居となっていました。



▲山茶花と黄葉と桜田濠

濠のこちら側土手に“柳の井戸”、井伊掃部頭邸跡(憲政記念館)には“桜の井戸”がありました。浅野家本家の松平安芸守邸跡(総務省、国土交通省)、井伊直弼が暗殺された地点(警視庁前)を過ぎると桜田門です。約50人の門番がいたという城内現存の最大級の変則枳形門をくぐると西の丸下(皇居前広場)です。

二重橋、将門首塚を経て清水門へ

二重橋はもともとは奥の鉄の橋を指し、かつては木製で濠が深く二重にしていたそうで、現在は手前の石橋と合わせ二重橋というそうです。右奥の伏見櫓も玉砂利を踏みながら眺めました。

広場を進んだ左側の坂下門は現在宮内庁の通用門で職員の制服姿が見えました。横の桔梗門(内桜田門)で濠



▲桔梗門、異櫓

が右に折れ、異櫓で左に折れていました。異櫓は本丸から見て辰巳(東南)の方角にある隅櫓で、「桜田二重櫓」ともいわれるそうです。

枳形門の大手門は江戸城の正門にかかわらず大きくないのは、見栄えより警備を重視したからということでした。かつて従者が待機した門の横で私達も腰を下ろして小休憩しました。

江戸城を向いて建てられた将門の首塚は内堀通りを隔てた酒井雅楽頭邸跡にありました。明治以降、庁舎の建設時いろいろな災いが起こって首塚は復興され、今でも近くのビルでは座席を塚の方に背を向けないなどいわれているようで、お線香の煙も絶えません。

カルガモの池を右に見、錦橋を左折して一橋徳川家屋敷跡を経て、城内の橋から集められた擬宝珠が印象的な平川門、そして落ち葉を踏み踏み、竹橋へと向かいました。途中、太田道灌公追慕之碑を見、雉子橋門を向かい側に見るとまもなく清水門です。門内は軟らかい土、落ち葉のじゅうたん、こけむした石の階段など昔のままのたたずまいで、武士が現れても違和感のない、江戸時代にタイムスリップしたかのような空間でした。

「九段下」へ向かって坂を上ると最後の蕃書調所跡(東大の前身)です。夕闇迫る4時30分頃には全班が無事に帰着、解散しました。

【記録】文・写真：広報部会・内匠屋京子

江戸博常設展を見る



1月25日(火)おだやかな冬の午後、今年度の常設展見学会が行なわれました。1階ホール前に12時45分集合、参加者は24名でした。6名前後の4班に分かれて順次6階の展示場に向かいました。

薄暗い日本橋から大名屋敷へ

展示物を保護するため入り口からすでに薄暗い照明もあって、いきなり江戸時代に迷い込んだかのような錯覚を覚えました。最初は足もとも確かめながらの「お江戸日本橋」、木の感触がなんだか懐かしい感じでした。

その橋のすぐ近くに、大名屋敷「松平忠昌邸」の30分の1の模型が展示されています。江戸には参勤交代で各大名の上屋敷・中屋敷・下屋敷・蔵屋敷の四つの屋敷がありましたが、その代表的な寛永の上屋敷だそうです。家来が「おなりー」と告げる、将軍しか通れない「御成門」は純金がふんだんに使われ、屋根も檜皮葺きでした。家族専用の「台所門」など当時のままの様子がうかがえます。明暦の大火後は儉約令が出され、多くの屋敷が黒塀の質素な門に変わっていったそうです。

今回、江戸城内の白書院の250畳の大広間の段差が身分差であるとの説明にうなづく方が多くいました。同時に天井にも段差があり、目線を低めると、将軍の座所、真ん中は御三家、下は諸大名の順で並び、特に将軍の座所は二重の丸天井で天井の造り・意匠・



▲展示の説明を聞く(説明者:藤井さん)

装飾まで差がありました。

次は「江戸図屏風の世界」でした。寛永時代の江戸のすがたが生き生きと描かれ、現代に引き継がれて今も名が残る橋の当時の様子が目の前に展開されていました。たとえば日本橋のたもとでは小舟から川岸の人にタイを手渡しているのではこの辺りは魚河岸だったことがわかるお話でした。ほかにも浅草寺近くの大川沿いをお神輿や仮装した武者行列が練り歩いているなど、町人たちが屏風いっぱい躍動していました。

江戸は水の町、上水道の発達

家康坐像手前の水墨画ふうの「江戸一目屏風」では、江戸が水の町であることがよくわかりました。

芝居小屋の屋根の上の天水おけを見ながら階下へ下りていきました。5階は江戸中期のジャンル別でした。特に興味を引いたのは上水道の発達でした。展示物はレプリカが多い中で唯一本物という木樋(水道管)は今まで目にしていたにもかかわらず、説明がつくと全然違うものに見えました。神田上水、玉川上水から絶え間なく流れ来る水が総延長100kmにわたって江戸市中をめぐり、「町人は間口」といわれて人々の生活を支えていたその木樋、水おけ(ジョイントの役割)は水漏れしないよう職人達の手で作られたものです。職人魂を見る思いでした。そして材質は松・くぬぎだったそうで、山林もおそらく大事に管理され、それらを切り出して江戸へ運ばれてきたのでしょう。

万治3(1660)年の江戸を1,400体の人形で表現したジオラマでは、大川でお大尽が花火見物をしているその屋形船のへさきに何と松の盆栽が置いてありました。

助六の舞台では團十郎が直接しぐさ



▲展示の説明を聞く(説明者:山本さん)

をやりながら傘の位置を決めてくれたそうです。「サー、抜け、抜け、抜けやー」と威勢のよい説明に見学者の皆さんから拍手がおきました。芝居小屋では木魚、雨うちわ、しめ太鼓、楽太鼓、ツケ板などの実演もしてくださいました。

東京ゾーンまで見学した班もありました。2~3時間で見学を終え、各班流れ解散となりました。

「説明者の持ち味が…」感想の数々

何人かの方に感想を寄せていただきました。「素晴らしかった。色々説明して下さったので、今まで気付かなかったこと・物、見落としていた物を見ることができ、ありがたかった。芝居小屋の中にも入れてくださり、楽器もプロ級にやっけてくださって感謝です。楽しかったです」「じっくり説明が聞けてためになりました」「何回来ても、説明者によってそれぞれの持ち味があって、それぞれに面白い」「何回も来ているのに、説明で初めて気がついたものがいくつもあった」「一度は来たことがあった。回り方も説明も違うので、また来たい」。

古文書も含め42万点もの所蔵品があるという江戸東京博物館にはまだまだたくさん魅力が詰まっているようです。

【記録】文:広報部会・内匠屋京子
写真:同・佐藤幸彦

◎活動概況

- ◆**落語と講談を楽しむ会**：12月21日(火)月番・田中文彬さん提供のDVD、カセットテープとレクチャーで「大正・昭和に大輪を咲かせた4人の巨人」と題して、志ん生、文楽、円生、金語楼の名人芸を鑑賞した。特に志ん生の大津絵節「冬の夜に」は珍しく興味深いものだった。参加者22名。1月18日(火)月番・松原良さんが「落語と江戸川柳」についてレクチャーした。江戸川柳の起こり・雑俳の前句附から実例をあげての雑俳の説明や落語「雑俳」との絡み、川柳から連想される落語、落語に見る川柳など一同面白く聞いた。参加者は23名。
- ◆**藩史研究会**：12月10日(金)有田欣哉さんが越後国「長岡藩」について研究発表を行った。少年時代の数年間を過ごした思い出の地を65年振りに訪ねての発表で、一同大きな感銘を受けた。参加者は28名。1月14日(金)安部良男さんが「出羽松山藩史および支藩に関する考察」と題して研究発表を行った。特に支藩・庄内藩は藤沢周平の歴史小説シリーズで海坂藩として舞台になったところで、安部さんの故郷への熱い思いもこもっていて、楽しく聞いた。参加者は26名。
- ◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：12月9日(木)、1月13日(木)、1月28日(金)に例会を開催。参加者はいずれも各8、9、9名。
- ◆**神田川を歩き楽しむ会**：12月19日(日)、23日(木)に第14回として、西武新宿線「沼袋」駅から新道橋に出て途中沼袋氷川神社に寄り、江古田公園まで妙正寺川沿

いに歩いた。ここで「江古田ヶ原・沼袋古戦場跡」碑を見学、妙正寺川に合流している江古田川を開渠部の起点である下徳田橋までさかのぼって歩いた。途中、東福寺、江古田氷川神社、江古田の森公園に寄り参拝・見学した。参加者は各31、40名。1月27日(木)に第15回として、前回歩いた古戦場の歴史をさらに詳しく知ろうと「決戦—豊島一族と太田道灌の闘い」と題する講演会(講師：郷土史家・葛城明彦さん)を江戸博1階学習室で開催した。参加者は70名。終了後、両国駅前新年会を行った(参加者52名)。

- ◆**『江戸名所図会』輪読会**：12月20日(月)中村貞子さんの担当で、芝増上寺由緒および関連寺院、建物の由来等を読み、みんなで話し合った。参加者は17名。1月17日(月)後藤幸子さんの担当で飯倉神明宮から愛宕山について読み、討議を行った。参加者は18名。



- ◆**各サークルとも引き続きメンバーを募集**しています。奮ってご参加ください(ただし、輪読系の2サークルについては現在満員のため欠員が出たときに先着順で参加していただくこととなります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。
申込・問合せ先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局 Tel.03-3626-9910

◆役員会

12月9日(木)17時開催。規約改正に合わせ「役員等候補者推薦委員会細則」の改訂を決めた。会計規則見直し案が提示され検討した。出席者12名。1月13日(木)17時開催。三部会合同会議の決定、総会の日時の連絡がされた。会計規則見直し案について再度審議を行い一部修正の上承認された。さらに事務の効率化および簡素化を図っていくこととした。出席者12名。

◆事業部会

12月2日(木)17時開催。11・12月の事業報告をした。12月「江戸の政治改革」セミナーへは多数申込みがあり対応などについて確認をした。出席者21名。

1月6日(木)17時開催。12月の事業報告、および今後の事業計画を決定。4月以降新年度の企画について検討し

会議・会合日誌

2010 / 12 ~ 2011 / 1

た。出席者21名。

◆広報部会

12月17日(金)14時開催。新年特集の「うさぎ」座談会の状況および『えど友』59号の最終校正について報告があった。『えど友』60号の担当と進捗状況の確認をした。広報部会作業ガイドライン案が提示され議論した。出席者10名。

1月21日(金)14時開催。『えど友』60号進行、広報部会作業ガイドライン案および取材写真の撮り方等について話し合った。出席者11名。

◆総務部会

12月27日(月)13時開催。『えど友』

59号の発送業務を行った。三部会開催、総務部会部員募集などについて検討した。出席者10名。

1月26日(水)16時開催。役員会報告、三部会合同会議、活動日程の確認等を行った。出席者12名。

◆役員等候補者推薦委員会

12月16日(木)16時開催。本年度末で1期2年経過の役員について継続の妥当性を検討した結果が委員長から報告され、今後該当者の留任意志の確認および新任役員の各部会への推薦依頼を行うこととした。出席者9名。

◆文政町方書上翻刻プロジェクト

12月2日(木)、12月16日(木)、1月6日(木)、1月20日(木) A、Bグループとも例会開催。出席者は(A) いずれも10名、(B)1月6日は休みで、各10名、9名、10名。

千住界隈を歩く

今野君枝

ぼかぼかした小春日和の中、「江戸四宿」のひとつ、旧日光街道・奥州街道の初宿「千住宿」を中心に江戸の面影を求めて歩きました。

JR常磐線など鉄道6路線が通る「北千住」駅西口から歩き始めました。今の千住のにぎわいは、明治時代に日本鉄道（現在のJR）の駅が宿場の中心に近いところに二駅「北千住」駅「南千住」駅が置かれたことに始まります。これは、他にないといわれています。私が「千住宿」に興味を持ったことのひとつです。

「北千住」駅を西口に出て駅前大通りを進み二つ目の信号があります。この信号の両側、南北に続く商店街が旧日光街道です。右側の宿場町商店街が、かつての「千住宿」の中心地です。商店街に入るとすぐに狭い路地があり、うっかりすると見落としそうです。この路地を右に曲がると千住宿内随一の大旅籠「中田屋」の離れがあり、明治天皇が東北巡幸の折にご休息所として、立ち寄っていました。今は、何も残されていません。その路地から旧日光街道に戻ります。

その路地を出たところが本陣のあったところ。そのビルの前に「千住宿本陣跡」の碑があります。そして、千住本陣跡と周辺の説明版があります。「千住宿の本陣」は面積361坪(1,193㎡)、建坪120坪(396.7㎡)、「門構え玄関付」の格式ある構えだったとされています。特に、「千住宿」は、参勤交代の大名行列に加え、日光東照宮へ参詣する諸大名があり、本陣は頻りに利用されていたようです。当時の面影をしのぶものは何もありませんが時代をさかのぼるといささかの感慨を覚えます。さて、宿場通りを北へ

進むと「ほんちよう公園」、ここを曲がって「長円寺」、ここには「千住絵馬」がかけられています。再び宿場の通りへ戻ると、右手の角が細格子造りのどっしりとした「横山家」、その家屋は江戸時代後期の建築とされ、玄関の柱に残っている傷跡は彰義隊が刀で切りつけたものといわれています。幕末期の典型的な商家建築です。通りを隔てて下町に今も残る「絵馬屋」吉田家があります。どちらも通りを一段下がった造りとなっています。

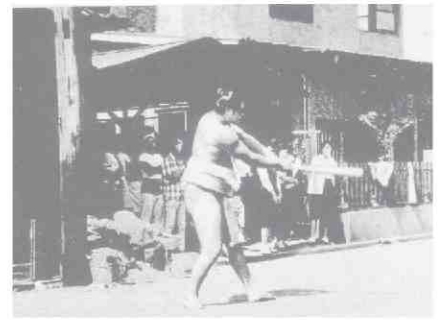
旧日光街道をさらに進むと左に分岐する道があり、こちらが日光街道の続きです。宿場のはずれに「千住の骨つぎ名倉」として名高い江戸の接骨医、名倉医院の長屋門がみえます。当時は大八車に乗せられ多くの病人が訪れたそうです。本当に見事な長屋門です。江戸をほうふつとさせます。現在も「整形外科千住名倉医院」として連綿と続いています。

私が、今回歩いた千住界隈は旧日光街道の北側のみになりましたが、南側にも江戸時代につながる史跡があります。また、ゆっくりと歩いてみたいと思っています。旧日光街道南北ともに、今は商店街となっていますが、「千住宿」が姿を変えて現代に続いているということを感じました。江戸時代は遠いようで近いという思いです。（参考文献『江戸四宿を歩く』街と暮らし社編：『昭和30年代・40年代の足立区』足立史談会監修 三冬社）

相撲の歴史と相撲食

国定美津子

江戸博には訪れながらも、お隣の国技館の相撲は見に行かなかったことのない私ですが、高校時代には近くの谷中に相撲部屋があり、昼食もそこそこに友人と見物に行った思い出があり、門前の広い路地でお相撲さん達が野球をしているのを間近に眺めていたものでした。当時、人気の大鵬関に「一緒に記念写真を撮らせてください」とお願いしますと、「縁起を担いでいるから、写真



▲部屋前の大鵬関と見物人

は撮らないことにしている」と断られました。道路の上に直に長く伸ばした「廻し」が干してあるのが印象的でした。そして現在、我家から歩いて30分程の所に「佐渡ヶ嶽部屋」があり、かつて松戸祭りにはお相撲さんのもちつきが大人気だったり、また、トレーナー姿で自転車を乗り回す琴歐洲に出会ったりと、相撲を身近に感じる環境です。

■相撲の歴史と力士

- ・定義の一つは、相撲とは、力技による格闘技の一種で「角力」ともいう。
- ・弥生時代(前300年—後300年頃)の稲作に伴う農耕儀礼として発生し、庶民間に発達した。
- ・奈良朝の頃、天皇家に取り上げられ年中行事として七夕の余興に行うようになった。
- ・『日本書紀』の天武11(682)年の記に、隼人が宮廷で相撲をとったとある。隼人は九州地方の種族に対する律令制的呼称。大和政権に反抗し「異民族」視され、国家と戦い薩摩、大隅、日向諸国の成立に至る。年1度京で宮門守護や舞楽を行った。
- ・平安時代に、五穀豊穰を占う国占の国家行事となり、宮廷儀式の相撲節会として発達。
- ・元禄年間(1688年—1704年)から勸進相撲が始まり、江戸中期以降に町人の人気を得た。
- ・明治維新後は、明治42(1909)年両国に旧国技館が完成。昭和29(1954)年蔵前に移転。昭和60(1985)年両国に戻った。

■相撲のルーツと継承者

隼人は「はやひと」ともいい、律令時代には九州南部に住する渡来人とされています。日本史辞典等には、隼人

の先祖は『記紀神話』の海彦とありますから、「海彦」も渡来人ということ。農耕儀礼から始まった相撲も源流は遠く大陸の西方にさかのぼるはず。稲作と共にもたらされた儀式相撲は、やがて大和人と渡来人との対戦で、格闘技的趣を呈してきたかに見えます。文化とその継承者の国柄は必ずしも一致するものではなく、現代のごとき外国人力士の台頭は、日本文化が大陸の人々に受け継がれる時の再来を感じさせます。

■相撲食と兵糧米

相撲の関取同士の立ち合いのあたりは2~2.5tになるといいます。私達には非日常に思える相撲界ですが、その食生活は意外にも古代の兵糧食に通じるものがあります。

兵士も相撲取りも1日2食で、約5合(0.9l)の御飯を食べます。しかし、兵士の携帯食は米がほとんどで、副食として干味噌や味噌玉と干煮大豆ぐらいです。兵糧米は、兵士自前の腰兵糧と、主筋の支給する米と、現地徴取分とがあり、焼味噌玉は1合(0.18l)の味噌で作る5日分です。

相撲取りはバランス良く栄養がとれるちゃんこ、稽古で体作りをします。激しい稽古なくして筋肉はつかず、脂肪太りかカロリーを消費して普通の体形になるだけとか。

兵糧米 (古代-明治)

○平穏時：1日朝夕餉2食、玄米5合

戦時中：1日朝昼夕白米8~10合

○腰兵糧：乾燥干白飯5合、煎り玄米

副食は：干味噌・焼味噌、干煮大豆

○戦地食：移動線に、兵站部隊を確保

相撲食 (佐渡ヶ嶽部屋)

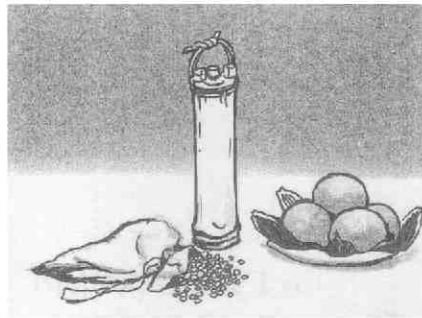
○1日：昼夕2食で、丼10~12杯以上

早朝：ゼリー飲料だけとって、稽古

○昼食：ちゃんこ、御飯5杯(2.5合)

昼寝：1~2時間寝て体を休ませる

○夕食：ちゃんこ、御飯5杯(2.5合)



▲戦陣食の干飯と味噌玉 (永山久男氏調製)

双葉山を目指す白鵬

佐藤 幸彦

平成22年11月の九州場所で白鵬は双葉山の69連勝を超えようとし、稀勢の里に敗れて63連勝に終わりました。もしかして70連勝を達成するかも知れないと皆が思う頃、国粋派?から、双葉山の69連勝は7場所にまたがるもので、当時は年に春(1月)と夏(5月)の2場所しかなく、それも11日か13日間だったのだから、白鵬がいま70連勝しても、5場所連続優勝を含む69連勝の実績には及ばないだろう、という意見も出ました。双葉山の時代と現代では環境が違い過ぎて、同じ条件で「強さ」を比較することは不可能です。単純に「連勝の数字の比較」と割り切って記録すれば良いことだと思います。つまり強さは色々な角度から分析すれば興味が増し、その中に「連勝の数字」も、一つの指標として記録されれば良いと思います。私は小学生の頃、双葉山の69連勝が終わったところから毎場所1回ずつ相撲を見に行きました。その頃の記憶をたどって双葉山の話をしていきましょう。

彼は幕下の時から双葉山という四股名でした。それは彼を立浪部屋に紹介した大分県警部長の双川喜一氏の双と、「梅檀は双葉より芳し」、とにもとづいてつけた名だと「講談社の絵本」に書いてありました。私が見ることができたのは15日間の場所の中日を過ぎた頃で、双葉山の相手は前頭のことが多くありました。そのような時、結びの一番になると観客は升席の畳の上で靴を履き、帰り仕度で立って観戦した

ものです。幕内の中堅を相手にした双葉山の相撲に、波乱はほとんどあり得ないのです。当時の両国国技館は通路が狭く長く、出口が非常に混み合ったので、皆早めに脱出したかったのです。その群衆にまじって、首から上がによつきり出た出羽が嶽の文ちゃんがついて、まな板に鼻緒をすげたような大きな下駄を履いているのに会うこともありました。

白鵬と双葉山の環境の違いについて述べてみましょう。双葉山の時代は仕切り制限時間が10分でした。大部分は時間一杯まで仕切り直しを繰り返していましたが、中には時間前に立つこともあったので、土俵から目を離すことができませんでした。仕切りの回を重ねるうちに力士の全身が潮潮して来るのを見るのはスリリングでした。この時代は優勝決定戦がありませんでした。同成績の場合、番付の上位者が優勝とされたのです。羽黒山は双葉山が君臨しているために何回か同成績で優勝を逃したと思います。幕内力士は東西に分けられ、東西対抗戦でした。当時出羽の海部屋が全盛で、西方はほぼ全員が出羽の海部屋と出羽の海系の春日野部屋、東方は立浪、二所の関、伊勢が浜、伊勢の海等の混成チームということもありました。横綱照国は伊勢が浜部屋でしたが東西のバランスのためか出羽の海チームに移り、双葉山の強敵となりました。双葉山の70連勝を外掛けで阻んだ安芸の海は照国と同時に横綱に昇進し、相撲巧者ではありませんでしたが、その後一度も双葉山に勝てませんでした。(この稿続く)

おかげで『えど友』も積10年

友の会の10周年記念事業も無事終わりましたが、『えど友』も本号で60号となり、満10年(年6回発行・10年)です。この間、一度の遅滞もなく発行できましたことは、関係者をはじめ会員の皆さんのおかげです。今後この「えど友プラザ」へのご投稿など、ご協力をお願いいたします。

【おせつ徳三郎】



木場の歴史を見てきた洲崎弁天

おせつ徳三郎

大店の娘とその店の手代の恋が主題の噺です。長い噺なので現在はその前半を“花見小僧”、後半を“刀屋”と分けて演じられます。今回は、お店のあった日本橋横山町界隈から、手代が娘を探して歩いた新大橋、そして二人が身投げした木場の辺りまでを歩いてみます。

日本橋横山町

現在の日本橋横山町は、馬喰町とともに小間物織維問屋街です。江戸期馬喰町に多くあった旅籠屋に投宿する旅人たちの求めに応じて小間物問屋、紙煙草問屋、地本双紙問屋などが開店し、これが今日に引き継がれています。ここへは、都営地下鉄「馬喰横山」駅、JR総武線快速「馬喰町」駅、東京メトロ日比谷線「小伝馬町」駅、JR総武線「浅草橋」駅の四つの駅から歩いて数分という立地の良さです。ですからこの辺りのにぎわいは当時から引続いているようです。そしてこの一帯は徳川家が幕府を開く前から集落があったところで、江戸期の史跡も多く残されています。そんな街中を歩いて、新大橋を渡ります。

新大橋

この橋が最初に架橋されたのは、元禄6(1693)年の師走です。大川(隅



▲横山町界隈の問屋街

田川)3番目の橋で“大橋”とよばれた両国橋に続く橋として“新大橋”と名づけられます。橋が完成していく様子を、当時東岸の深川に芭蕉庵を構えていた松尾芭蕉が、「初雪やかけかかりたる橋の上」と詠んでいます。

そしてこの橋は、広重の代表作の一つで「大はしあたけの夕立」の浮世絵に描かれた橋としても知られています。絵は日本橋側から対岸の安宅のあたりを眺め渡したものとされます。その後、明治18(1885)年に新しい西洋式の木橋として架け替えられ、明治45(1912)年にはピントラス式の鉄橋として現在の位置に架橋されました。

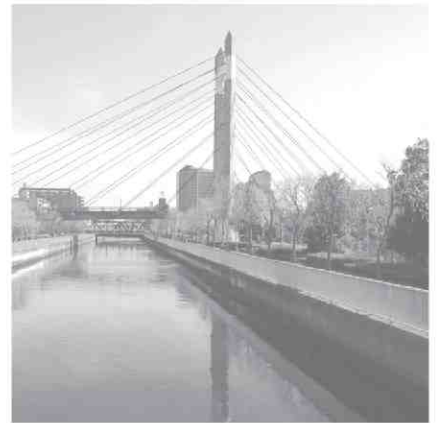
日本橋横山町の大店のひとり娘おせつ。年頃なので婿を取らせようとしませんが、なかなか首をたてに振りません。



▲首都高6号線高架下からの新大橋

奉公人の徳三郎と深い仲になっているとのうわさを耳にした主人は、おせつが可愛がっている小僧の長松を呼び、お灸をすえるとおどかして問いつめます。長松から去年の花見で、おせつが徳三郎とあひびきをしていたことを聞き出します。主人は徳三郎にひまを出し、おせつに婿を取るはなしをすすめることにします。ここまでが“花見小僧”。

そして、お店からひまを出された徳三郎は伯父さん宅に身を寄せます。そこでおせつが婿養子をもろう婚礼の日だと知って逆上、手元の金をかき集めて刀屋の店先に飛び込みます。刀屋の主人は徳三郎の様子がおかしいので問いただすと、これから婚礼の席へ乗りこんで、心変りしたおせつを刺して自分も死ぬつもりという。その心得違いを刀屋が諭しているところに、おせつをさがし求める声。婚礼の席から、おせつが逃げ出したとのこと。夢中で刀屋をとび出した徳三郎は、おせつの叔母が深川にいることから、もしやと木場までやってくると、花嫁衣裳のまま



▲仙台堀川に架かる木場大橋

のおせつとぼったり。二人が手に手を取りあって、「末は必ず夫婦だよ」と、“南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経”とお題目を唱えて橋から飛び込みますが、木場のこととて下は一面の筏。「徳や、死ねないね」「お材木で助かった」と本来の下げまでが“刀屋”です。

木場

木場とは元来、貯木場もしくは木材の切り出し場です。江戸では隅田川の河口に設けられ、その初期から建設資材の集積場として発展しました。特に江戸期には明暦の大火などの大火災がしばしば起こり、その度に紀州など地方から大量の木材が木場を目指して運び込まれたところでした。明治期以降になると、木場の沖合いのゴミ等による埋め立てが進み、木場の目の前から海が姿を消してしまいます。そして昭和44(1969)年、今までの貯木場としての機能が新木場へ移転したため、従来の貯木場は埋め立てられ、跡地に木場公園が造成されています。ですから、今日この付近には当時をしのばせるものは皆無です。

噺は「お材木で助かった」で終わりますが、この二人の行く末は、おせつの親はゆるして夫婦となることを暗示させます。身分の違いがやかましかったこの時代、近松門左衛門の筆になると“心中”ですが、落語家の舌にかかると大らかなものとなります。すべてが自由となった今、おせつと徳三郎の心情を推しはかることなど、難しいことになってきています。

【取材】歩いた人(文・写真)：

広報部会・岡田守弘
イラストを描いた人：同・松原良

催事案内

古文書講座

新年度は5月から開講

古文書講座の新年度第1期は5月から下記日程で開講します。

申込の受付は3月末までです。A講座かP講座か(午前か午後か)の希望を必ず明記してお申込みください。

23年度は会場の都合で従来慣例の週、時間が変更になったり、A、P合同の講義が増えます。ご注意ください。また、従来入門担当講師の小松賢司さんが退任され、後任に現在初級担当の田中潤さん、初級担当講師は新たに吉成香澄さんが担当されます。

◆入門編

- 講師：田中潤さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5/11(水)、6/22(水)合同、7/6(水)合同

◆初級編

- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5/25(水)、6/15(水)、7/20(水)合同

◆中級編

- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5/21(土)合同※、6/18(土)合同※、7/16(土)合同

- 時間：A講座は10時30分～12時30分、P講座は14時～16時、合同は10時開始、合同※は14時開始
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室または学習室1、2
- 定員：各講座とも80名(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】上田太一(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展「五百羅漢一増上寺秘蔵の仏画

幕末の絵師 狩野一信

◆江戸時代、徳川将軍家の菩提寺だった増上寺に、幕末の絵師・狩野一信〔文化13(1816)年～文久3(1863)年〕が描いた五百羅漢図が秘蔵されていることはあまり知られていません。一信は約10年の歳月をかけて、空前絶後の100幅を構想。残念ながら、96幅まで描き終えたところで病没し、残りは妻・妙安、弟子・一純らが補って完成させました。文久3(1863)年に増上寺に奉納されたこの100幅を、関連資料とともに一堂で紹介する特別展です。担当の橋本由起子学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：3月18日(金)17時～19時
- 申込締切：3月10日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール/企画展示室
- 定員：200名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第103回「江戸は一日にしてならず」

講師 谷口榮さん(葛飾区郷土と天文の博物館・学芸員)

◆東京下町は、江戸時代以前の歴史に馴染みの薄い地域のようなので。識者も含め多くの方が、東京下町に広がる低地部は人の住みにくいというイメージが強く、この地域が発展したのは徳川家康の江戸入府によってなされたという理解しているからです。それ以前の江戸城周辺は、アシ原沼、入江が多く、寒村だったと史書が記していますが、江戸は決して未開発の土地ではありません。東京下町に所在する遺跡や史料の吟味をもとに、「川」をキーワードに近世都市江戸成立以前の歴史像を披歴していただきます。

○講師略歴：たにくち・さかえ

昭和36(1961)年、東京葛飾区生まれ、葛飾育ち。国土館大学文学部卒業。昭和63(1988)年、葛飾区教育委員会勤務。日本考古学協会会員(理事)、日本歴史学協会会員、地方史研究協議会常任委員。明治大学非常勤講師(平成15年～19年)として歴史時代の考古学、NHK教育テレビ高校日本史講座を担当。著書は『シリーズ遺跡を学ぶ57 東京下町に眠る戦国の城 葛西城』(新泉社 平成21年)など多数。

●開催日時：3月26日(土)14時～15時30分

●申込締切：3月15日(火)必着

●会場：江戸東京博物館・1階ホール

●定員：200名 同伴者可(はがきに氏名連記)

●参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第104回「江戸衣裳～武家、商人、職人など男女の着物とその変遷を楽しむ～」

講師 菊地ひと美さん(江戸著者・画家)

◆江戸男女の衣裳・全体を俯瞰してお話していただきます。男性は職業服なので、武家、商人、職人などの〈身分別〉と、礼装、上着、袴、羽織、鳶の腹掛け、股引などの〈单品別〉のそれぞれについて、女性の衣服は流行があり、初期から後期にかけて身幅や、丈、帯幅、色、髪髷の形が激変していきますので、その流行をみながらのお話です。男性の袴にも流行があり、町人男女の礼装は？ 粋な柄とは？ など見どころ聞きどころいっぱいです。

○講師略歴：きくち・ひとみ

昭和30(1955)年、伊達藩生まれ。衣裳デザイナーを経て早稲田大学や江戸博で学び、江戸の著作活動を開始。日本橋再開発で脚光を浴びる。江戸博玄関前の「江戸日本橋絵巻」(30m)の画家。国立劇場から制作依頼の「絵巻4巻」は、ローマなど海外2カ国の国立美術館で展覧。著書に「江戸おしゃれ図絵」(講談社)、(仮)「江戸衣裳辞典・図鑑」(東京堂出版、今年4月末～6月発刊予定)など。

●開催日時：4月23日(土)14時～15時30分

●申込締切：4月12日(火)必着

●会場：江戸東京博物館・1階ホール

●定員：200名 同伴者可(はがきに氏名連記)

●参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

見学会

「広重『名所江戸百景』周辺探訪 —その4(浅草北周辺)」

◆この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪します。探訪では広重「名所江戸百景」の世界にタイムスリップし、江戸の町の成立や発展、人々の生活や声などを身近に感じていただければ幸いです。今回は浅草・浅草寺北側の芝居町だった旧猿若町、旧吉原、そして今戸周辺を歩きます。江戸時代、浅草寺門前は「さかりば」としてのにぎわいが、芝居町の猿若町には「いき、だて」を競う歌舞伎役者たちの競演が、吉原には妖艶なまでの妓楼や花魁たちの「きらびやかさ」がありました。所要時間は約3時間半、浅草松屋前で解散となります。

【今回訪ねる広重の作品】『浅草金龍山』『猿わか町よの景』『よし原日本堤』『廓中東雲』『浅草田圃西の町詣』『墨田河橋場の渡かわら籠』

- 開催日：3月27日(日)12時45分集合
集まり次第、時間前でも出発します。
- 集合場所：浅草文化観光センター前(最寄駅：都営浅草線「浅草」駅、東京メトロ銀座線「浅草」駅)
- 申込締切：3月17日(木)必着
- 定員：100名 同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)
【企画担当責任者】山本隆(事業部会)

お申込方法

*「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく!

◆普通はがきに、①催事名(略名可)・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

- *いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。
- *「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日から金曜日(10時～12時、13時～17時)にお願いいたします。
- *「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

乞う、ご期待! 3月15日から開催

●特別展

「五百羅漢—増上寺秘蔵の仏画 幕末の絵師 狩野一信」

会期 2011年3月15日(火)～5月29日(日)

休館日：毎週月曜日 ただし3月21日は開館、3月22日が休館。5月2日、16日は開館予定。

会員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
*小学生、中学生、高校生は65歳以上と同じ。

次回予告

●特別展

都営交通100周年記念特別展

「東京の交通100年博 ～都電・バス・地下鉄の“いま・むかし”～」

会期 2011年6月21日(火)～8月28日(日)

休館日：毎週月曜日 ただし7月18日、8月15日は開館、7月19日が休館。

*観覧料は未定のため、次号でご案内します。

企画展のご案内

●企画展

好評開催中!

「140年前に江戸城を撮った男 横山松三郎」

会期 2011年1月18日(火)～3月6日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室

●次回企画展

「芝 増上寺 ～秀忠とお江の寺～」

会期 2011年3月15日(火)～5月29日(日)

会場 常設展示室5階 第2企画展示室



会報<えど友>第60号

平成23年3月1日発行(奇数月1日発行)

編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長) 副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、岡田守弘、深尾恵美子、福島信一、松田悠美子、中里弘子、
内匠屋京子、笹川道央、中村貞子、原盛年、藤原理子、佐藤美代子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910